

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第176集

平賀中屋敷遺跡群 平賀中屋敷遺跡Ⅴ

長野県佐久市平賀中屋敷遺跡Ⅴ発掘調査報告書



2010.3

佐久建設事務所
佐久市教育委員会

例 言

- 1 本書は佐久建設事務所による道路改良事業に伴う平賀中屋敷遺跡群 平賀中屋敷遺跡Ⅴの発掘調査報告書である。
- 2 事業主体者 佐久市跡部65-1 佐久建設事務所
- 3 調査主体者 佐久市巾込3056 佐久市教育委員会 教育長 土屋盛夫
- 4 遺跡名及び発掘調査所在地 平賀中屋敷遺跡群 平賀中屋敷遺跡Ⅴ (HNYⅤ)
佐久市平賀字下屋敷5363-1番地他
- 5 調査担当者 出澤 力
- 6 本書の編集・執筆 上原 学 出澤 力
- 7 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

- 1 遺構の略称は以下の通りである。
H-堅穴住居址 M-溝跡 P-ピット
- 2 スクリーントーンの表示は以下の通りである。
 遺構-地山断面  遺物-灰釉
- 1 挿図の縮尺は以下の通りである。
遺構-堅穴状遺構・ピット・溝跡-1/80
遺物-土師器、須恵器、灰釉陶器、瀬石、古銭 1/4
- 2 遺物の写真番号と実測図番号は一致する。
- 3 遺構の標高は各遺構ごとに統一し、水糸高を標高とした。
- 4 調査グリッドは小グリッド4×4m、大グリッド40×40mである。

目 次

例言・凡例・目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
1. 立地と経過	1
2. 調査体制	1
3. 遺跡の概要	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	2
1. 自然環境	2
2. 周辺遺跡	3
3. 基本層序	4
第Ⅲ章 遺構と遺物	7
1. 堅穴住居址	7
2. 集石遺構	9
3. 溝状遺構	11
第Ⅳ章 まとめ	12

写真図版

抄 録

第I章 発掘調査の経緯

第1節 立地と経過

平賀中屋敷遺跡は北方を西流する滑津側左岸の沖積地上に位置し、標高は688m内外を測る。周辺の地盤は河床礫層と沖積粘土層で、比較的安定した土地であるため、現在も広く水田として利用されている。調査区周辺には多くの遺跡群が所在し、小規模ではあるが、道路改良、学校体育館建替え等の事業に伴う発掘調査が行われており、弥生時代から中世の遺構・遺物が確認されている。

今回、佐久建設事務所による道路改良工事が行われることとなり、遺構の有無を確認するため試掘調査を実施した。その結果、住居址等の遺構及び遺物が認められたため、開発主体者である佐久建設事務所と文化財保護協議を重ね、遺構の記録保存を目的とした発掘調査を行う運びとなった。



第1図 発掘調査位置図 (1:100,000)

第2節 調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	木内 清 (平成18～21年度)
			土屋 盛夫 (平成21年度)
事務局	社会教育部長	柳沢 義春 (平成18～19年度)	内藤 孝徳 (平成20年度)
		工藤 秀康 (平成21年度)	
	社会教育次長	山崎 明敏 (平成19年度)	柳沢 本樹 (平成20年度)
		金澤 英人 (~平成21年5月)	
	文化財課長	中山 悟 (平成18～19年度)	森角 吉晴 (平成19年度～)

文化財保護係長	高村 博文 (平成18年度)	高柳 正人 (平成19～20年度)
	酒井 順一 (平成20年度～)	
文化財調査係長	高柳 正人 (平成18年度)	三石 宗一 (平成19年度～)
文化財保護係	萩原 留美 (平成18～19年度)	須恵久美子 (平成20年度～)
	高橋 浩一 (平成18～20年度)	佐々木ふく江 (平成21年度)
文化財調査係	林 幸彦 並木 節子 (平成19年度～)	須藤 隆司
	小林 眞寿 羽毛田卓也 富沢 一明 上原 学	
	神津 格 (平成18～21年度)	井出 泰章 (平成21年度)
	出澤 力	
調査主任	佐々木宗昭 森泉かよ子	
調査担当者	出澤 力 (平成18・21年度)	上原 学 (平成19年度)
調査員	浅沼ノブ江 安藤 孝司 岩崎 重子 碓井 知子	
	岡村千代美 小幡 弘子 菊池 喜重 小林百合子	
	土屋 武士 中嶋フクジ 日向 昭次 細壺ミスズ	
	渡辺久美子 渡辺 学	

第3節 遺跡の概要

遺跡名	平賀中屋敷遺跡群 平賀中屋敷遺跡V (HNYV)
所在地	佐久市平賀字下屋敷5363-1番地
調査期間	平成18年5月8日 ～平成18年5月19日 (現場) 平成18年7月18日 ～平成19年3月2日 (整理) 平成21年10月7日 ～平成22年3月19日 (整理)
調査面積	170㎡
調査遺構	竪穴住居址 3軒 溝状遺構 2条 遺物包含層 ビット
調査遺物	弥生土器 (甕) 土師器 (坏・甕・片口鉢) 須恵器 (坏・甕) 灰軸陶器 (碗) 陶磁器 (碗・甕・播鉢) 石製品 (すり・敲き・編物石) 古銭



調査風景

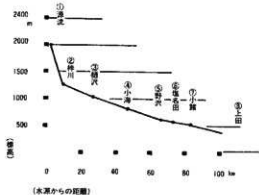
第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

佐久地域は、周辺を山地・台地に囲まれた盆地状を呈し、一般に佐久平と呼ばれ、北には現在も活動を続け白煙を立ち上らせる浅間山、南には蓼科山が存在する。東には北関東山地の北端が延び、群馬県との境をなし、西には御牧原・八重原といった台地が広がっている。そして、佐久平を大きく二分するかのように一級河川である千曲川が南佐久方面の支流を集めながら水量を増し佐久市内に流れ込む。市内に入った千曲川は野沢付近まで北流した後、やや川筋を北西方向に変え、立科山麓の支流を集めた片貝川、浅間山の麓に源を発す湯川、関東山地からの滑津川等と合流する。また、佐久地域は地質学的にも南北で大別でき、佐久平のほぼ中央である志賀川が滑津川と合流して千曲川に注ぐ東西線を境とし、河川の北側段丘上と南側沖積地とは10～30mの比高差を持つ断崖を認めることができる。北部地域は、北の浅間山麓末端部の台地で、浅間の噴火によって台地上に厚く軽石流が堆積している。この堆積層は、雨水の浸食によって深くえぐり取られ、浅間の麓から放射状に幾つもの浸食谷 (田切り) を形成し、切り立った断崖によって台地を細長く分断している。佐久市北部の遺跡は、主にこの南北方向に延びた田切り地形の台地上に形成されている。これに対し、南部地域は千曲川の

氾濫源沖積地と支流の谷口扇状地となり、河川礫層と沖積粘土層が堆積した比較的安定した土地で、周辺地域は現在も広く水田として利用されている。遺跡は沖積地の微高地上及び、沖積地周辺に張り出す尾根上及び尾根麓付近の緩斜面地等に形成される場合が多い。

今回調査対象となった平賀中屋敷遺跡Ⅴは、南部沖積地に位置し、東部山地から注ぐ滑津川の左岸、谷口扇状地末端付近に位置する。
(参考 北佐久群志 第一巻 自然編)



千曲川概念図

報告書1985「縄村遺跡Ⅱ、遺跡の環境」転載

第2節 周辺遺跡

平賀中屋敷遺跡Ⅴ周辺に存在する遺跡を時代ごとにもとると縄文時代では北方丘陵先端付近の寄山遺跡が所在する。発掘調査では中期の住居址が多数を占め、遺物は土器・2,000点にも及ぶ打製石斧等の石器が発見されている。また、南方の背後に独立丘陵を背負った千曲川右岸段丘上では大奈良遺跡の調査が行われ、中期中葉後半から後期初頭にかけての遺構・遺物が発見され、打製石斧については寄山遺跡を上回る3,500点近くが出土している。

弥生時代では、北方の関東山地から西方向に張り出した尾根状支脈先端の比較的平坦で開けた緩斜面に後家山遺跡・東久保遺跡が所在する。これらの調査では中期栗林期の住居址及び後期清水期を中心とする住居址80軒以上が発見され、後家山遺跡では一部の住居址を取り囲む溝が確認されていることから高地性集落的な性格が高いと考えられている。遺物は、土器に加え、木棺墓と思われる土坑からガラス小玉、螺旋状の鉄鋼、住居址内から炭化した籾先等が出土している。

また、尾根下の沖積微高地上に所在する樋村遺跡、平賀中屋敷遺跡群内で行われた発掘調査によっても多くはないが後期の住居址が発見されている。

古墳時代前期になると、北方に広がる一段上がった台地上に前期後葉の住居址9軒を発見した深堀遺跡が所在するが全体的に数は少ない。中期後葉あたりから周辺地域、特に滑津川北の微高地上では住居址数が増える傾向にあり、滑津川右岸の開戸田遺跡、樋村遺跡では300軒以上の住居址が調査されている。この他、東の扇田遺跡、平賀中屋敷遺跡群内でも後期の住居址が確認されている。これらの調査結果から、少なくとも平賀中屋敷遺跡群北方では、古墳時代後半から人口が増加した可能性が推察できる。

また、遺跡周辺に張り出した尾根状支脈縁辺及び谷口扇状地丘陵寄りの微高地上には古墳が多数存在しており、集落との関係が興味深い。

奈良・平安時代は北の樋村遺跡11軒、開戸田遺跡で9・10世紀が5軒、東の扇田遺跡で奈良時代10軒、平安時代56軒、平賀中屋敷遺跡で10世紀以降の住居址が数軒調査されている。東の扇田遺跡では8世紀から11世紀の住居址が発見されているが、特に9・10世紀は45軒と多くなっている。

中世以降になると、対象地周辺は屋敷跡が存在していたとされている地域であり、溝状遺構が発見されている。また西側の尾根先端付近には自然の地形を利用した山城である平賀城跡が所在する。こ

の城は、もとは佐久郡内で勢力をふるった平賀氏の居城であったが、その後大井氏、武田氏のものへと変わっていった。城は自然地形を利用し本城、城平、搦手曲輪によって形成されている。本城は丘陵山頂部に位置し、本郭、二の郭、三の郭に別れ、山腹には多数の段曲輪を構築している。

今回の対象地一帯は、平賀城跡の麓に位置していることから、平時における生活の場として利用されていた地域と考えられる。

No	遺跡名	所在地	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世	備考
1	平賀中屋敷遺跡群	平賀		●	●	●	●	本調査
2	八反田城跡	瀬戸				●	●	H11年発掘調査
3	屋敷古墳群	瀬戸			●			
4	城山城跡	瀬戸					●	
5	長峯遺跡	瀬戸	●					
6	宮田遺跡Ⅱ	瀬戸				●		H13年発掘調査
7	宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ	瀬戸	●		●	●	●	H13年発掘調査
8	東久保遺跡	瀬戸・平賀			●	●		H13-16年発掘調査
9	東久保遺跡Ⅱ	瀬戸・平賀			●	●		H14年本調査
10	後家山遺跡Ⅰ	平賀		●				H13-14年発掘調査
11	後家山古墳群	平賀			●			
12	後家山遺跡Ⅱ	平賀		●				H13-15年発掘調査
13	東久保古墳群Ⅰ号墳	平賀			●			H13年発掘調査
14	東久保古墳群	平賀			●			
15	間戸田遺跡	平賀			●	●		H14・15年発掘調査
16	上の台遺跡	瀬戸		●				S57年発掘調査
17	樋村遺跡	平賀		●	●	●		
18	樋村遺跡Ⅱ	平賀		●	●	●		S58年発掘調査
19	川原田遺跡	平賀				●	●	
20	東碓石古墳群	平賀			●			
21	東碓石遺跡	平賀				●		
22	内宿城跡	平賀					●	
23	月崎古墳群	平賀			●			
24	葦原遺跡	平賀			●	●		
25	下屋敷古墳	平賀			●			
26	中塚遺跡	平賀				●		
27	平賀城跡	平賀・内山・常和					●	
28	北谷津遺跡	平賀				●		
29	上屋敷古墳	平賀			●			
30	南谷津古墳群	平賀						
31	竹原遺跡	平賀		●	●	●		
32	萩本古墳	平賀			●			
33	籠遺跡	平賀	●		●	●	●	

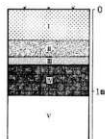
周辺遺跡一覧表

第3節 基本層序

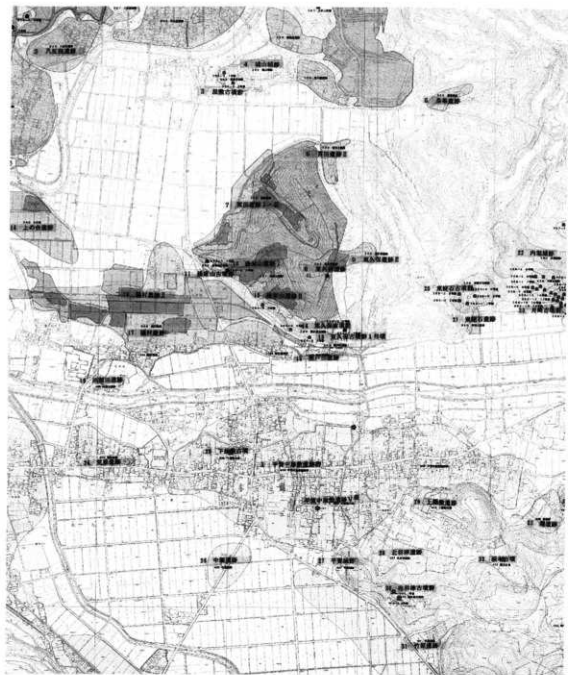
調査区Ⅰ・Ⅱ区は後世の擾乱を受けており、遺構確認面までその破壊は及ぶ。調査区Ⅲ区は擾乱されていなかった。

基本層序 土層説明

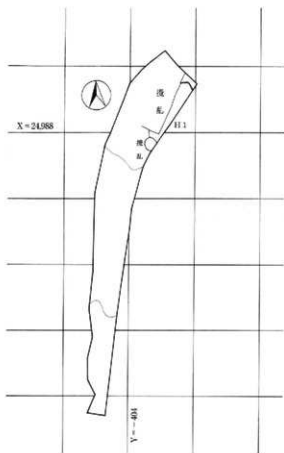
- I・II 耕作土層
- Ⅲ 10YR2/1 (黒色土)。土器包含層。
- Ⅳ 10YR3/4 (暗褐色土)。小礫、炭化物を含む。
遺構検出面。
- V 10YR4/4 (褐色土)。砂礫層。



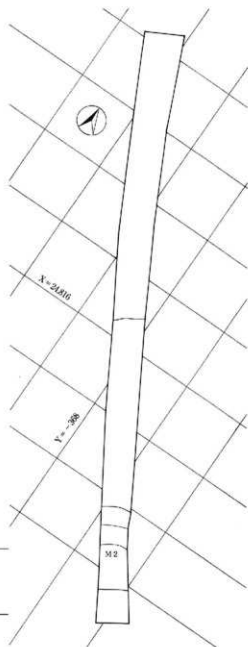
第2図 基本層序模式図



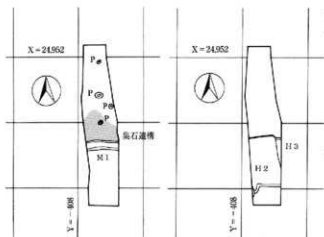
第3圖 周邊道路位置圖



第1区



第3区



上面

第2区

下面

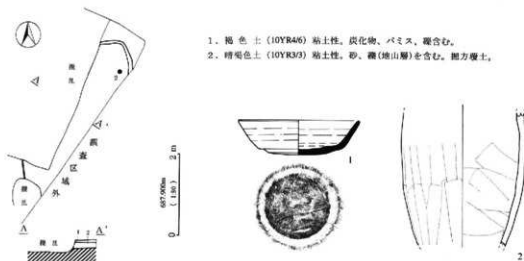
第4圖 平賀中原敷遺跡V調査全体圖

第三章 遺構と遺物

第1節 竪穴状住居址

1. H1号住居址

遺構は調査対象地北側のⅠ地区に位置する。遺構の大半は調査区域外及び掘乱によって破壊され、確認された規模は僅かである。確認面から床面までの深さは5cm内外と浅い。平面形態は方形または長方形と思われる。床面はやや硬質である。柱穴、カマド等は確認できなかった。堀方は10cm内外を測り、砂礫を含む褐色土が埋め込まれていた。遺物は、状態の良いものとして、床面上から土師器長胴甕の胴部、器高が低く、底部へら削りを施した須恵器環が出土した。遺物の特徴から奈良時代、7世紀前半の遺構と思われるが、覆土中からは古墳時代後期の土師器坏片も認められた。



1. 褐色土 (10YR4/6) 粘土性。炭化物、パミス、礫含む。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘土性。砂、礫(堆山層)を含む。掘方覆土。

第5図 H1号住居址実測図・出土遺物

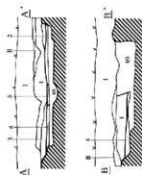
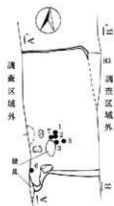
番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整・文様	残存部位	備考
1	須恵器	環	14.8	7.3	4.2	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ほぼ完形	
2	土師器	長胴甕	-	-	(16.3)	外面ヘラケズリ 内面ロコナデ	胴部のみ	

H1号住居址遺物観察表

2. H2号住居址

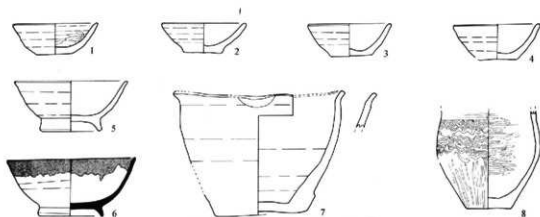
遺構は調査対象地中央付近のⅡ地区に位置し、常滑焼甕が出土した集石遺構の下層部にあたる。また、同一面においてH3号住居址を切り、西及び南東コーナー付近は調査区域外となる。規模は南北30m、東西は調査規模で1.70m、床面までの深さは15cm内外を測る。床面はやや固く、床面の南寄りにカマドの石材及び土師器の散布が認められた。ピットは確認できなかったが、西側調査区域に灰のたまった窪みが存在した。カマドはめずらしく南壁に構築されている。西側3分の1は調査区域外となり東袖及び焚口部の石材、火床が残存していた。床下はH3の覆土となり、はっきりとした堀片は確認できなかった。

遺物は土師器の坏・碗・片口鉢、灰釉陶器の碗が出土した。坏は小型化したもので、灰釉陶器はつけがけ三日月高台であることから大原2号窯跡と思われ、カマド火床付近から出土した。灰釉陶器と土師器に若干時間差があるようにも思われるが小形化した土師器坏が多数出土していることから平安時代、10世紀後半～11世紀前半代の遺構としたい。



- I. 表土、擾乱層。
- II. 擾乱層。
 1. 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化物、バミス少量含む。
 2. 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物、バミス少量含む。
 3. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘土⁷や⁷少量含む、カマド崩落層か。
 4. 黒褐色土 (10YR2/3) 地山⁷や⁷混入。(灰)
 5. 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化物⁷や⁷多く含む。

0 687.900m
(180) 2m



第6図 H2号住居址実測図・出土遺物

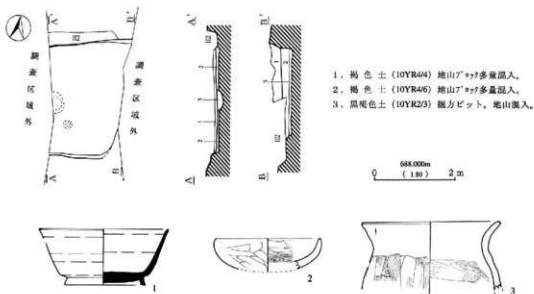
番号	器 種	器 形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調 整・文 様	残存部位	備 考
1	土師器	坏	10.5	4.4	3.7	ロクロナデ 内面一部ヘラナデ 底部回転糸切り	定形	
2	土師器	坏	10.4	4.8	3.6	ロクロナデ 底部回転糸切り	定形	
3	土師器	坏	10.2	5.1	4.0	ロクロナデ 底部回転糸切り後ヘラケズリ	定形	
4	土師器	坏	10.5	4.4	4.2	ロクロナデ 底部回転糸切り	60%	
5	土師器	碗	14.0	5.9	6.1	ロクロナデ	40%	
6	灰釉陶器	碗	16.0	7.8	7.0	ロクロナデ 内外面に施釉	ほぼ定形	
7	土師器	片口鉢	20.9	11.2	14.5	ロクロナデ	ほぼ定形	
8	弥生土器	小型壺	-	5.4	(12.0)	頸部帯指輪状文 胴部上方帯指輪状文 下方縦ミガキ	頸部欠損	混入遺物

H2号住居址遺物観察表

3. H3号住居址

遺構は調査対象地中央付近のII地区に位置し、常滑焼堿が出土した集石遺構の下層にあたる。また同一面においてH2号住居址に切られ大きく破壊され、西及び東側は調査区域外となる。調査規模は南北2.74m、東西は調査規模で1.96m、床面までの深さは20cm内外を測る。床面はやや固く土間状を呈している。床面上でのピット及びカマドは確認できなかった。堀方は5cm内外の厚みで褐色土が埋め込まれ、床面同様硬質であった。

遺物は土師器の坏・甕、須恵器の高台付坏が出土した。土師器の坏は丸底の底部から立ち上がり、やや内湾気味に口縁に至る。須恵器の高台付坏は底部回転糸切り後高台貼り付けでやや器の高さがあがる。土師器の甕の器厚はやや厚めである。土師器坏及び須恵器の形状から本住居址は奈良時代、8世紀前半とした。



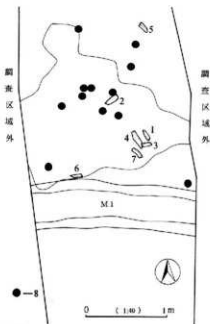
第7図 H3号住居址実測図・出土遺物

番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調査・文様	残存部位	備考
1	須恵器	高台付杯	16.0	10.0	6.8	口クロナデ 底部回転糸切り後高台付	50%	
2	土師器	杯	12.8	-	(4.2)	外面 ナデ後ヘラミガキ 外面 ナデ 一部ナデ後ミガキ	20%	
3	土師器	甕	16.9	-	(8.0)	外面 ヨコナデ後ハケメ 内面 ヘラナデ	口縁部	

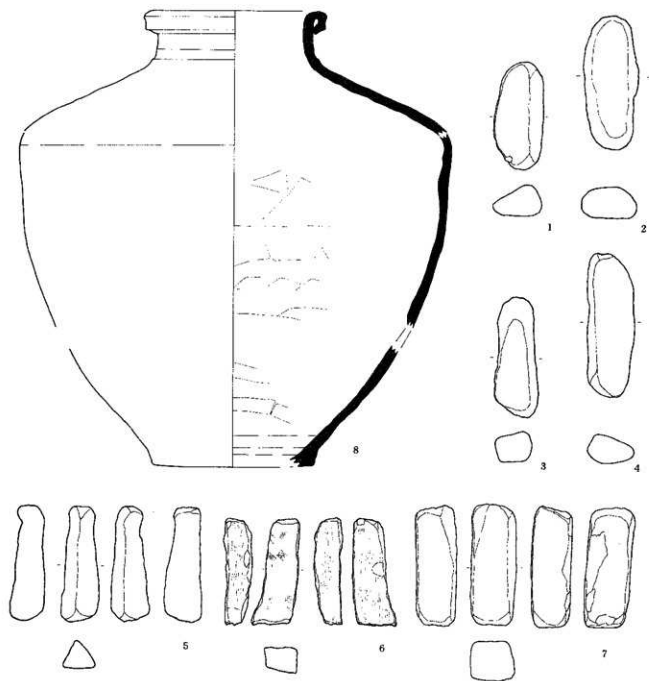
H3号住居址遺物観察表

第2節 集石遺構

遺構は調査対象地中央付近のⅡ地区に位置し、奈良、平安時代のH2、H3号住居址上層に位置する。集石は径1.5m程度の範囲内に散在し、須恵器の同一個体である壺破片が出土した。また、古銭が2点出土し、うち一点については中国の北宋時代の銭である「天禧通寶」であることが分かった。天禧通寶は1017年～1021年の間に鑄造されたものとされているので、少なくとも集石遺構はその年代より古い所産ではない。また集石の自然石に混じり、使用痕のある磨り・蔵き等に使用されたと思われる石器も存在し、一部に熱を受けた痕跡が認められた。



第8図 集石遺構実測図・出土遺物



第9図 集石遺構出土遺物

番号	器種	器形	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考		
1	石製品	礮物石	11.4	5.2	3.3	255.3	安山岩		
2	石製品	礮物石	14.2	5.7	3.3	382.5	安山岩		
3	石製品	礮物石	12.8	4.7	3.2	242.8	安山岩		
4	石製品	礮物石	15.3	4.9	3.1	288.7	安山岩		
5	石製品	礪石	12.3	3.4	2.9	192.9	安山岩		
6	石製品	礪石	11.4	3.4	2.7	224.5	安山岩		
7	石製品	礪石	12.9	4.7	4.2	537.5	安山岩		
番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整・文様		残存部位	備考
8	須臾器	甕	17.6	17.0	48.5	ロクロナデ 口縁部ナデ		50%	
番号	器種	名前	口径(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	備考			
9	古銭	天船通寶	2.5	0.1	2.44				
10	古銭	不明	2.4	0.1	2.37				

集石遺構遺物観察表

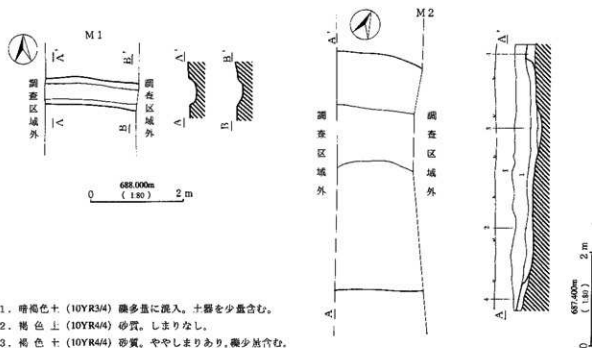
第3節 溝状遺構

1. M1号溝状遺構

遺構は調査区Ⅱ区を東西に走る。集石遺構が確認された上層面で発見された。規模は確認された部分で長さ0.88m、幅3.52m、底幅0.52m、深さ0.26mである。小規模でごく浅い溝状遺構で、遺物はほとんど認められないが、集石遺構の一部が溝状遺構の上面に掛かる部分があり、新山で言えば集石遺構より古い遺構となる。

2. M2号溝状遺構

遺構は調査区Ⅲ区を調査範囲で確認される限りにおいては東西W-15°-Sの方向に走る。調査された長さは1.98m、幅は0.6m、底幅0.3m、きわめてなだらかな落ち込みを呈し、深さは0.08mを測る。溝状遺構覆土中においては遺物をほとんど確認していない。遺構の年代・性格はごく限られた範囲での調査であるためはっきりとはしないが、遺跡周辺の中世居館に関連する溝状遺構である可能性はある。



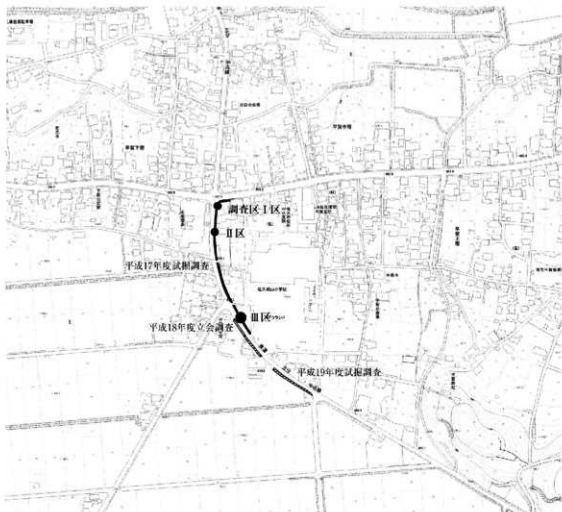
第10図 M1・2号溝状遺構実測図

第IV章 まとめ

今回の調査によって発見された遺構は、奈良～平安時代に掛けての堅穴住居址と、その上層に重複する集石遺構、そして溝状遺構である。M2号溝状遺構は中世の居館址に関連する遺構である可能性がある事はすでに述べた。これらの遺構は、これまでの発掘調査によって本対象地周辺で発見された遺跡とその性格はほぼ一致し、本対象地が平賀中屋敷遺跡群内に展開する集落址の一部であることが確認された。

今回の発掘調査は前述の通り平成17年度に行われた試掘調査によって遺跡が確認された地域を対象としているが、その後18年度には調査区Ⅲ区の南東の水田で立会調査、19年度にはⅢ区北側で試掘調査が実施されている。そのいずれでも遺構・遺物の発見はなく、現在水田が広がる対象地南側は湿地状の低地になることがわかった。集落は南側で低地に面する微高地状に展開していると考えられる。

今回、調査に当たり長野県佐久建設事務所様、佐久市立城山小学校、また近隣住民のみなさまに多大なご協力を賜りました。このことについてお礼申し上げ、筆を置かせていただきたいと思ひます。



第11図 平賀中屋敷遺跡V調査概略図(1:5,000)



H 1号住居址 (南から)



H 1号住居址出土遺物 (西から)



H 1号住居址廻り方 (南から)



H 2号住居址 (南から)



H 2号住居址出土遺物 (南から)



H 2号住居址カマド (南から)



H 3号住居址 (南から)



H3号住居址廻り方(南から)



集石造構(南から)



M1号溝状遺構(南から)



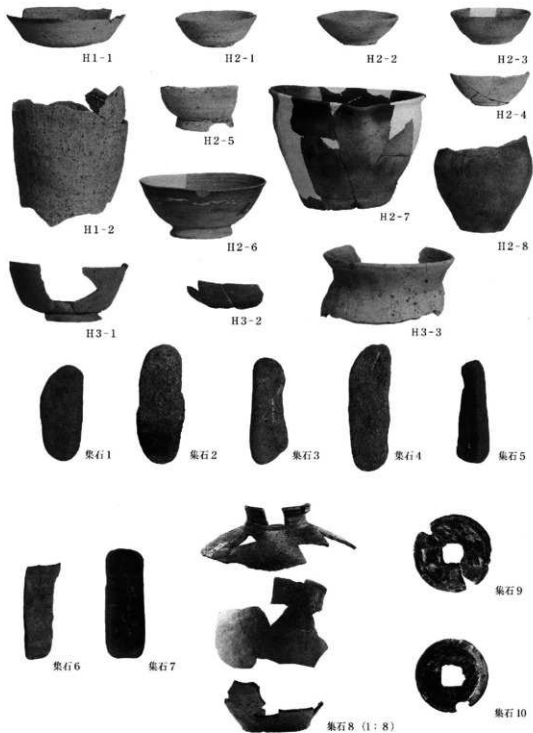
M2号溝状遺構(南から)



調査区Ⅰ区全景(南から)



調査区Ⅲ区全景(北から)



平賀中屋敷遺跡V出土遺物

報告書抄録

書名	平賀中屋敷遺跡群 平賀中屋敷遺跡V
ふりがな	ひらかなかやしきいせきぐん ひらかなかやしきいせきご
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第176集
編集者名	上原 学 出澤 力
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2010.3.19
郵便番号	385-0066
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	平賀中屋敷遺跡群 平賀中屋敷遺跡V (HNYV)
遺跡所在地	佐久市平賀字下屋敷5363-1他
遺跡番号	432
経度	36°13'39"
緯度	138°29'33"
調査期間	2006.5.8~2006.5.19 (現場) 2006.7.18~2007.3.2 2009.10.7~2010.3.19 (整理)
調査面積	170㎡
調査原因	道路改良
種別	集落址
主な時代	奈良・平安時代・中世
遺跡概要	遺構 竪穴住居址3件(奈良・平安時代) 溝状遺構(平安時代~) 集石遺構 ビット 遺物 弥生土器(甕) 上器器(坏・甕・片口鉢) 須恵器(坏・甕) 灰釉陶器(碗) 石製品 古銭
特記事項	

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第176集

平賀中屋敷遺跡群 平賀中屋敷遺跡V

編集・発行 長野県佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込3056

文化財課
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953
TEL 0267-68-7321

印刷所 有限会社 ヴィアン
